

公開研究会：『反「大学改革」論』を巡って—教育・研究とガバナンスの現在—

趣旨文

本研究会は、広島大学高等教育研究開発センターのご支援の下、このほど刊行された藤本夕衣・古川雄嗣・渡邊浩一編『反「大学改革」論——若手からの問題提起』（ナカニシヤ出版、2017）の問題提起を受けて開催されるものです。問題の中心は、グローバル化、大衆化、産業構造の変化等に対応するための一時的な方策がそのまま常態化している現在の「大学改革」ですが、ここでそれについて「問題提起」を行っているのは、書籍の副題の示すように、三十代を中心とする若手大学教員・研究者たちです。

この世代の教員・研究者は、政府、関係省庁の主導下に進められる「大学改革」について、特有の（複雑な）葛藤に苛まれています。確かに、「大学改革」として進められる各種のプログラムには非学術的、非論理的、非合目的的との印象をもたずにはいられないものもあります。しかし教育、研究、社会貢献、大学運営のそれぞれの「現場」で、伝統的な方法を採用していたのでは立ち行かなくなるのではないかという不安もぬぐえません。というのも、いわゆる「ユニバーサル化」時代における大学は、必ずしも学力が十分ではない大学生を迎えるようになったわけですが、そのことによって教育の内容や方法に関する省察が必要になっていることは疑いないからです。しかしながら、たとえば、「進学するつもりなんかなかったけれども、高校の進路指導に従った結果いまここにいるだけなので、学問なんかに興味はない」、「高額の授業料を支払うために借りた奨学金を返済するために、将来の仕事に直接役に立つ知識や技術を教えてほしい」等という学生たちに向き合うことは容易ではありません。そうした状況に対応するべく、矢継ぎ早に各種プログラムが開始、実行されていますが、本書の執筆者たちも含め、その最前線にいる若手教員・研究者たちは、それぞれに雇用形態・職責——これもまた『反「大学改革」論』の論点たるべき事柄ですが——を異にしながらも、既に青息吐息です。

そうした状況を反映してか、現時点でも、さまざまな「現場」からの声——より多くの議論を聞きたい、さらなる論点を確認したい、続編を読みたいといった——が聞こえてきています。われわれとしても、事柄の性質上、本を出してそれで終わりとは考えていません。そこで、公開で「大学改革」の関係者と議論を行うこととしました。高等教育財政にお詳しい田中秀明氏（明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科教授）、「大学改革」の現場に通暁している崎山直樹氏（千葉大学国際教養学部講師）、大学のガバナンス・マネジメント論を専門とする大場淳氏（広島大学高等教育研究開発センター准教授）をお招きし、世代や立場を超えて——あるいはときにぶつけあって——「大学改革」の方向性を議論できればと思います。

この研究会が「大学改革」に関する公共的な議論の活性化にいくぶんなりとも寄与することを期しつつ、さまざまな「現場」で日々格闘しておられる皆さまのご参加を心よりお待ちしております。